

企業人の「三上」

企業経営漫談士 岡野実空

「三多」と来れば、次は「三上」。どちらも出処は、北宋の政治家、詩人・文学者、歴史家でもある欧陽脩。「三上」は「文章を練るのに最もよく考えがまとまる3つの場所。すなわち馬上・枕(ちん)上・厠(し)上」(広辞苑)。今回、「馬上」は非日常のレジャーに譲り、企業人の日常の思考の場である、「車上」「枕上」「厠上」という新「三上」を考えます。

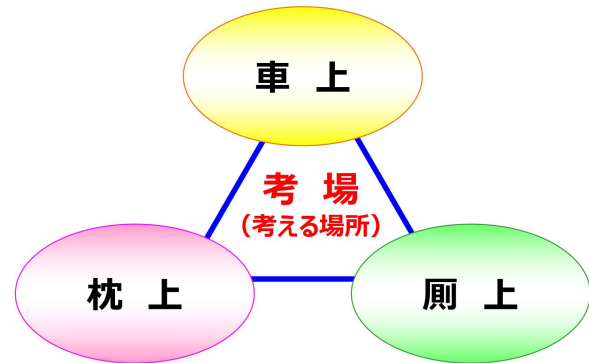
車上:「電車・自動車の中」

本来は馬の鞍でゆったりと揺られながら考えるということですが、昨今それは贅沢な趣味の世界。いま移動中にあれこれ考えるなら、電車か自動車の中が大半です。実際、車窓から見える外の景色や、社内の乗客、広告などからは、さまざまな企画のヒントが得られます。ところがいま、多くの企業人は、通勤などで真逆の行動に夢中。すなわち、もはや現代人の脳の一部となったスマホの中に取り込まれ、「情報機器」という道具に滅私奉公しています。その姿は、チャップリンの名作『モダンタイムス』の1世紀を経たりメイクそのもの。またその上司にあたる各社幹部も然り！グリーン車や黒塗リハイヤーに乗り、外も見ず、ひたすら読んでいるのは「日本株式会社社内報」(日本経済新聞)。いま世の中を動かしている「生活者」とは別世界に身を置き、彼らを「エンドユーザー」(某首相は「こんな人たち」と呼んでいる限り、社会に適合した現場からの企画や提案に全く実感が湧かず、スピーディーな意思決定ができないのは無理もありません。

枕上:「枕の上」

いままで分からなかったこと、考えていた答が、突然「あっ！」とひらめく「アハ！体験」は、皆さんもお持ちだと思います。それが車上よりはるかに多いのは、明け方うつらうつらのレム睡眠時。ネタ探しに明け暮れる落語家やタレントは、枕元にノートや録音機を置いて寝るそうですが、MCNのアキバ系コンサルタント・松波道廣氏によると、昔からその行動を推奨していた企業人は、彼の出身ソニーの創業者・井深大氏。かくいう私も朝起きるきっかけは、ほとんどアハ！加齢によって爆睡できなくなったおかげで、うつらうつら時間が大幅に伸びたので、ネタやオチが浮かぶと、そのままPCへ直行(職業病)。そのため夜は、アハ希望課題を反芻しながら床に就きますが、翌朝想定外の答が「下りて」くることもしばしば。その一方で、車中のうつらうつらは夜の寝不足補填にはなるものの、ほとんどアハ！とは無縁のようです。

KM 3-5 企業人の新「三上」



厠上:「便座の上」

トイレで思考し、優れた製品を生み続けた代表者は、金属深絞り加工の世界的な職人である、岡野工業の岡野雅行氏。ケイタイ、スマホが薄くなり、注射針が痛なくなったのは、彼の偉大な功績です。彼の思考場所は、主にトイレ。そのため厠への投資は半端でなく、そこから生まれ続けるユニークな製品がマスコミを大いに賑わせ、某首相もシジョウ見学に駆けつけたほどでした。また彼の著書や講演も、江戸っ子の気風(きっぷ)に溢れ大好評でしたが、2013年企業成長時の麻疹(脱税)に罹って以降、経営者としての不徳を悟り？すっかり大人しくなってしまったのは、少々残念です。岡野工業「金隠して尻隠さず」。

「三多」(When)、「三上」(Where)、という古来の思考に、S・ジヨブズは、スマホという時空を超えた「人工知能」(How)を提供してくれました。今後「考える輩」として「人間」を続けるか、「動く輩」としてその「奴隷」となるかは、皆さん(Who)次第。「人間」を選べば、自分の人生で、なにを(What)、なぜ(Why)するかを新「三多三上」で考える、広大な「知識社会」が待っています。

平成 29 年 7 月 24 日 実空